

「安曇野まつかわ馬羅尾高原郷土の森」協定締結を生かした村づくり

すずむしとあがりこサワラ 郷土のシンボル 自然豊かな村をめざして

松川村役場

経済課

農林係長

原 勇一

中信森林管理署

業務課

森林ふれあい係長

○矢部 博文

松川森林事務所 森林官

かまくら ひろかず

鎌倉 浩一

要旨

北アルプスの麓、信州は安曇野に位置し、豊かな自然、歴史や伝統・文化を有する松川村のシンボルの一つに有明山ありあけやまがあります(写真1)。有明山は信濃富士とも呼ばれ、山岳信仰の山としても地域住民に愛されています。有明山麓に位置する馬羅尾国有林内には「あがりこサワラ」の群落があり、中信森林管理署と松川村はこのあがりこサワラ群落を保全・活用するため「郷土の森」に設定しました(写真2)。



写真1 高瀬川から有明山を望む景色



写真2 馬羅尾国有林内に存在する
あがりこサワラ群落

1 はじめに

(松川村の紹介)

雄大な北アルプス連峰を源とする、芦間川溪谷からなる神戸原扇状地こうどはらは、古くから自然と共に暮らし、守ってきた松川村のシンボリックな自然エリアとなります。また、村のほぼ全域が様々な動物・植物の生息地となっています。

そこで、この豊かな自然環境及び田園景観を保全することを目的に、全国で初となる「安曇野松川村すずむし保護条例」を平成22年9月に制定し、地域の貴重な自然環境の保護と利用を通じた地域社会の振興に力をいれています。

なお、松川村のシンボルである、すずむしは



図1 すずむし小包便とマスコットキャラクター

「すずむし小包便」として、夏から秋にかけ全国に発送され、さわやかな音色で喜ばれています(図1)。

あがりこサワラや、すずむし保護条例など自然環境保護の機運が高まる中、長野県内で第1号となる「山の日」を平成23年12月に制定し、先人たちの努力により今日までに守り育てられた、美しく豊かな山々を後世に継承し、山の恵みに感謝し村民挙げて山を大切にする日としました。

また、松川村発祥の「安曇節」はこの地域の風土を余すことなく表現し、山にちなんだ多くの民謡が残されています。

2 あがりこサワラとは

「あがりこ」とは、樹木を台伐りすることにより、萌芽し奇怪な樹形となるものを一般的に呼びます(図2)。代表的なものに日本海側の積雪期における薪炭利用の目的で伐採されたブナのあがりこ林があります。他にも全国各地に様々なあがりこ型樹形が確認されていますが、この台伐り萌芽施業は、植栽を行う更新作業を必要とせず、極めて合理的な施業方法として確立されてきました。

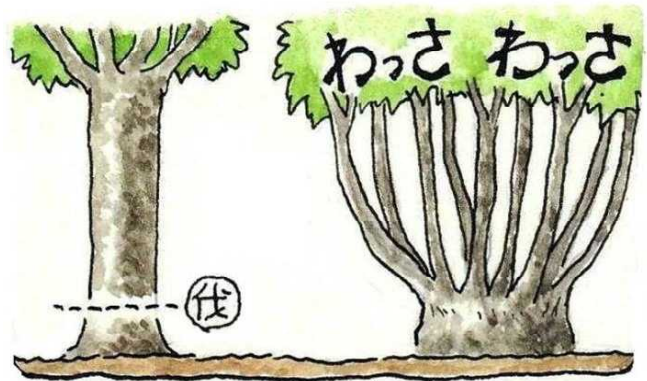


図2 広葉樹の台伐り萌芽(絵:平田美紗子氏)

今回の主役であるサワラは萌芽力が低く、幹を伐採してもその場所からの萌芽は期待できません。そのため側枝を主幹として立ち上げます。よって、次の台伐りはさらに側枝が発生する上部で伐採しなければなりません。その結果、台伐り位置が上に上がり、独特なサワラのあがりこ樹形が形成されます(図3)。

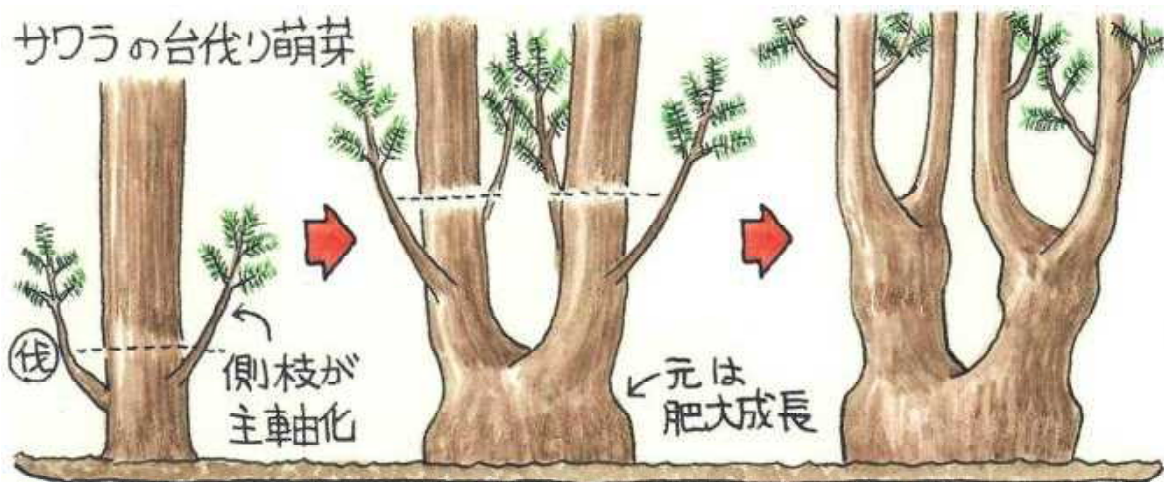


図3 あがりこサワラの形成過程(絵:平田美紗子氏)

なぜ、あがりこサワラが形成されたのか、目的は何だったのかが疑問となりました。

サワラは水に強い性質から、一般的に桶の材料や屋根板として古くから利用されてきました。しかし、松川村史や文献、また、国有林の資料などを調べても、なぜそのような森林施業が行われたのかは不明で、その利用目的など現在も謎のままです。

3 「郷土の森」設定に至るまでの経緯

(1) 取り上げた背景

平成22年度、当時森林総合研究所の鈴木和次郎主任研究員より「樹木の再生力を巧みに利用した「あがりこ」は、現在では、ごく一部の地域に森林施業の名残として存在するのみであり、過去の人々と森林の関わりを具体的に展示する貴重な歴史的遺産である。有明山登山道にあるあがりこサワラの巨木林は非常に珍しいものなので、保存できないか」との提案がありました。鈴木研究員の調査によると、馬羅尾国有林内にあるあがりこサワラ群落の伐採施業による利用ピークは今から80年から100年前であったと推定されるとのことでした。

これを契機に、中信森林管理署としても存在を把握していた馬羅尾国有林内のあがりこサワラ群落について、後世に残す貴重なものとして保護林の設定に向け、具体的に動きだしました。

(2) 「郷土の森」の設定

中信森林管理署において保護対策を検討する中で、松川村に対してあがりこサワラの貴重性と保護の必要性を説明したところ、松川村でも地域の資産として保護し、また地域振興にも役立てたいとの意向が示されました。その後も、保護林の設定を念頭に両者による現地検討会や行政懇談会などが行われ検討を重ねました(写真3)。



写真3 現地検討会の様子

あがりこサワラの保護と地域振興に資することを目的とした保護林の一つである「郷土の森」に設定するとの結論に至り、平成24年1月17日、中部森林管理局において当局長と松川村長による「安曇野まつかわ馬羅尾高原郷土の森」協定締結式が行われました(写真4)。



写真4 協定締結式の様子

また、この郷土の森設定に伴い、各報道機関から多数の取材があり、関心の高さがうかがえました(写真5)。



写真5 各報道機関による取材

(3) 保護林の概要

保護林は、原生的な森林生態系からなる自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、施業及び管理技術の発展などに資することを目的として、区域を定めて禁伐等の管理経営を行うことにより、保護を図る国有林野のことです。

国有林野事業では、文化財保護法や、自然公園法の制定に先駆け、大正4年に保護林制度を発足させて以来、保護林の適切な保全・管理に努めてきました(図4)。

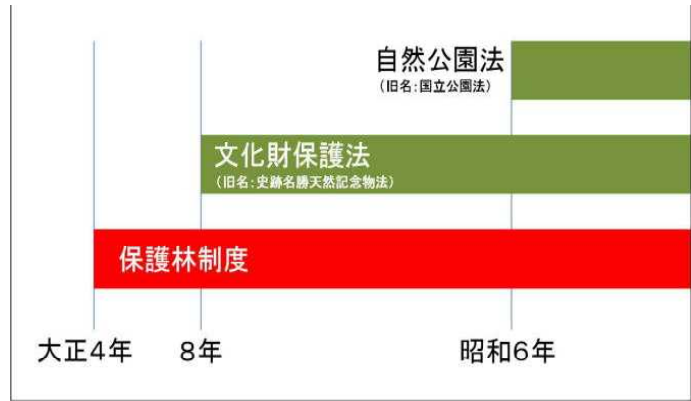


図4 保護林制度の成立

(4) 「郷土の森」について

保護林の一種である「郷土の森」は、地域における象徴的な意義があり、森林の現状の維持について地元市町村の要請がある森林を保護し、併せて地域の振興に資することを目的としています。

「郷土の森」は全国に40ヶ所、中部森林管理局管内に12ヶ所あり、全国的にも非常に珍しいサワラの「あがりこ」巨木林を保護するための「郷土の森」設定は全国でも初めての事例となります(図5)。

なお、あがりこ型樹形のサワラ群落は、有明山周辺のほか、山梨県山梨市の小烏山中腹^{こがらすやま}のサワラ学術保護林にのみ存在が確認されています。

全 国	中部局管内
40カ所 	12カ所 
 ↑てるは郷土の森 (九州森林管理局) ←津志嶽シャクナゲ 郷土の森 (四国森林管理局)	 ↑鍋倉山郷土の森 (北信署) ←水木沢郷土の森 (木曾署)

図5 「郷土の森」設定の状況

4 現地調査

「郷土の森」設定に先立ちあがりこサワラの実態を把握するため、中信森林管理署では馬羅尾国有林内にあるあがりこサワラの毎木調査を平成23年11月に実施しました。調査地は馬羅尾国有林587は林小班の該当地7.28haとしました。調査方法としては、対象樹木をあがりこ型の樹木のみとし、

樹木の側枝が主幹化した幹の最長部を樹高に、枝分かれしていない箇所1.2mの位置で直径を測りました。また、側枝が主幹化した本数についても調べました(図6)。

結果は、あがりこ型樹木 計119本が確認され、そのうち113本のサワラが存在することが分かりました。あがりこサワラの平均直径は118cm、平均樹高は21.9m、樹木1本当たりの平均主幹化本数は4.2本となりました。なお、あがりこサワラの中には最大直径が3mを超え、主幹化本数が11本となるものも存在しました(写真6)。

あがりこサワラの調査

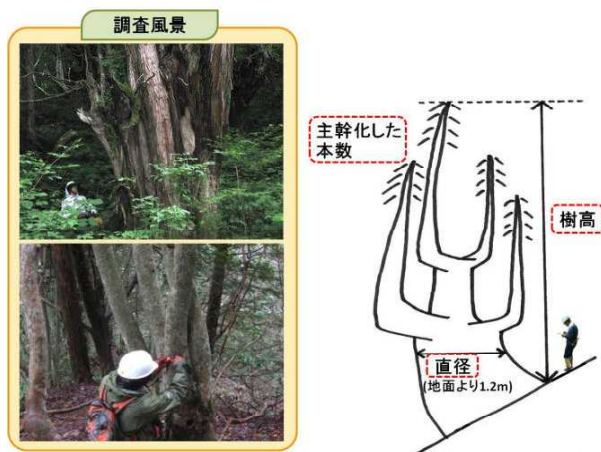


図6 現地調査



写真6 郷土の森に存在する「あがりこサワラ」たち

5 取組事例

(1) 育樹祭

平成23年10月には、松川村の協力を得て中信森林管理署主催の育樹祭を馬羅尾国有林内で行い、地元子ども達にふるさとの自然を守り続けてもらうなどの目的から、小学生を主体にあがりこサワラについての森林教室と散策を実施しました(写真7・8)。



写真7 森林教室であがりこサワラの説明をしている様子



写真8 実際にあがりこサワラに触れている様子

(2) 松川村「山の日」制定記念ウォーク

この郷土の森には、様々な行事で幅広い世代が数多く訪れています。平成24年5月19日には、松川村「山の日」制定記念ウォークが行われ、約100名が参加しました(写真9)。ウォーキングの参加者からは「馬羅尾の神秘・自然の力強さを感じた」、「松川村の魅力を再確認した」、「四季折々の表情を見てみたい」等の感想がありました。



写真9 松川村「山の日」制定記念ウォーク

(3) 大北地区植樹祭後のサワラ見学会

平成24年5月30日には、大北地区植樹祭後に
行われたあがりこサワラ見学会で小学5年生約100
名が散策し、あがりこサワラに実際に触れ体感しました(写真10・11)。



写真10 あがりこサワラの形状を手で表現



写真11 根上り部分を通り抜ける児童

6 おわりに

今後、あがりこサワラを活用していくための前提として、あがりこサワラなど神秘的な自然環境の保全を第一の目的とし、必要最小限の施設の設置にとどめて利用していく考えです。そして、あがりこサワラを中心に松川村が主体となって観光資源の掘り起こしを進め、具体的には民間活力を生かしたツアーの実施などを行っていきます。また一方では、観光客が増え、踏み荒らしやいたずらなどが起こることが考えられます。これらに対しては、パトロールを定期的に行うことが有効と考えられますが、誰がどのようにパトロールするかなどの課題があります。

目標としては、貴重な自然環境の保全活動や学習の場、憩いの場として、地域住民に愛され、守り、活用していくことができると考えています。そのためにも、関係機関とより一層密接な連携を図り、あがりこサワラなどを地域のシンボルとして持続的に活用していきたいと考えています。

<参考文献>

鈴木和次郎：「山と博物館」（市立大町山岳博物館）第57巻5号 20012.5

「森林技術」（日本森林技術協会）No. 803 2009.2 「論壇」 p2-6